

外国出張報告



人獣感染症研究チーム 岡松 政敏

目的・用務： 第6回鳥インフルエンザ国際シンポジウム参加
期 間： 平成18年4月2日～4月8日
出張場所： イギリス、ケンブリッジ、セントジョンズ大学

[用務の内容]

この度、科学技術連携施策群の効果的・効率的な推進プロジェクトの中の「野鳥由来ウイルスの生態解明とゲノム解析」の予算により、2006年4月3日から4月6日にかけてイギリス、ケンブリッジのセントジョンズ大学において Veterinary Laboratories Agency (VLA) 主催で開催された第6回鳥インフルエンザ国際シンポジウムに参加し、“Characterization of H5N2 influenza A viruses isolated from chickens in Japan” というタイトルでポスター発表しました。

シンポジウムは「鳥インフルエンザの発生とアジアのH5N1」、「診断法」、「公衆衛生」、「種間伝播を含む病原性」、「疫学と生態学」、「防疫対策」、「ワクチン」、「貿易問題と法律」、「最新問題」の9セッションに別れており、各セッションではテーマを絞って、発表、討論が行われました。近年アジアを中心に高病原性鳥インフルエンザが流行し、家禽だけでなく、公衆衛生上も大変問題となっています。このH5N1高病原性鳥インフルエンザの近況については、とくに野鳥を介した感染の拡大について、どの国においても問題視していました。そのため各国では実際に野鳥のサーベイランスを行っており、その方法についても検討が行なわれていました。現在、国内では材料を発育鶏卵に接種しウイルスを分離する方法を用いたサーベイランスが主流ですが、ヨーロッパなどではリアルタイムPCRを用いて多検体処理し、その検査で陽性のもののみを発育鶏卵に接種するという方法がとられ、年間数万検体のサーベイランスを実施していました。診断法に関しては、リアルタイムPCR法を用いて高感度、多検体処理を目指す一方、LAMP法やNASBA法といった新しい診断法についての研究成果も発表されました。今後これらの方法も検討していく必要性を感じました。

[所感]

本シンポジウムでは、私の研究分野である鳥インフルエンザに関する話題で、各国から著名な研究者が多く参加していました。とくに、各国の研究機関で第一線の鳥インフルエンザ研究をしているIan Brown (イギリス)、Ilaria Capua (イタリア)、David Swayne (アメリカ) の3人を中心に本シンポジウムは進行し、国内の防疫と研究



講演の様子

の両立だけでなく国際的な教育のリーダーシップをとる重要性を肌で感じることができました。動衛研の研究者として将来あるべき姿を見たような気がします。自分自身の研究発表に対しても、考えさせられる質問、指摘があり、今後の研究に役立てたいと考えております。

本シンポジウムが私にとって海外で初めての発表経験となりました。同時に、最新の研究動向に関する情報を収集することができ、今後の研究を進める上で大変有意義なものとなりました。

最後になりますが、この機会を与えていただいた関係者の皆様に深謝いたします。